



TITLE:

遠輕に於ける皆既日食 (續日食報告  
號)

AUTHOR(S):

小山, 寛一

---

CITATION:

小山, 寛一. 遠輕に於ける皆既日食 (續日食報告號). 天界 1936, 16(185):  
434-436

ISSUE DATE:

1936-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167325>

RIGHT:

## 遠輕に於ける皆既日食

會員 小山 寛 一

1936年6月19日の皆既日食觀測に北海道に行くことにつき5月下旬迄躊躇してゐた。所が山本先生の「日食ノ話」を一讀して決心がついた。皆既時に於ける美觀が寫眞にも、言葉にも現はせぬものとすれば、此肉眼で見るより外に仕方がない。「行く」と心が定まつた。

さて、そうすると場所を何れにするか？ 花山天文臺觀測隊の陣地の地圖をくつて遠輕ときめた。

6月初旬より新聞、雜誌の記事を集めた、時日の迫るにつれて、觀測隊の活動が詳細に報道され、心はすでに遠輕にとんでゐるものの、休暇の出る迄は止むを得ない。漸く16日に急行に投じて19日朝遠輕の家庭學校内の觀測地に着いた。然し思へば臺員諸氏の長き月日の準備、本日の決戦を目前の最緊張の御心境、特に周圍は當地の人達が警戒線を敷いて餘人は近寄せず、其上焚火、燈火を禁止して、ひたすらに觀測の萬全を希ひつつある程の場合なれば、東亞天文協會の一員として、敬意を表し、御成功を祈りて、平和山に到らんと刺を通ぜしに、高城先生は他に協會員も見えてゐるからとのお話にて、現場参加の幸福にあいました。

花山天文臺よりは、高城、山本、大口、草場、長谷川の諸氏、天文協會よりは、小槇、吉井、津田の諸氏、其外に竹内博士が學生と共に参加されてゐた。

準備完了。いよいよ時刻が迫つて來た。諸氏の顔は緊張の極、少しく青ざめ、空を見つめてゐる。北緯44度の空は紺青に澄めども、白雲の去來はげし、各地よりの報告は電話、ラヂオにて刻々に到る。「當地以北は大體晴天なるも斜里は雲多し、當地は其中間………雲の切間………」などと竹内博士がいつてゐらる。大口氏は「僕は最後迄悲觀論者だ!!」といひ乍ら口をぎゆつと結んでファインダルの下にゐらる。高城先生は終始沈黙して大反射鏡に片手をかけ、ぢつと空を見つめてゐらる。山本さんは若き未來の學徒として

の眼を輝かしつつ10センチ望遠鏡の前にかまへてゐる。竹内博士は烏打帽を



ダイヤモンドリングの壯観 (高城氏撮影)

後向きにして宛然飛行家の如くにして、今やおそしと待ちかまへてゐらる。小槇先生は大きな體を小さな坐ブトンにのせて自愛の屈折鏡をのぞいてゐらる。

來たつ！ 時刻が!!

高城先生の相圖で長谷川君が秒を呼ぶ。各自が一齊に望遠鏡をのぞく。初虧の時刻觀

測。最初に高城先生の聲がした。何と云ふ。瞬間的な現象であらう。之で一いきいれる。

天運なる哉。白雲は遠く去つて一天拭へるが如し、大反射鏡には神様のお札とテルテル坊主がつけてある。靈驗まことにあらたかである。各地の様子が刻々に來る。悲喜交々である。太陽はどどんかけてゆく。平和山には群集が三々五々觀測をしてゐる。いよいよ三日月のやうになつてきた。

14時50分 西南風起る小枝を動かす。

14時56分 東風にかはる。やゝ強くふく。

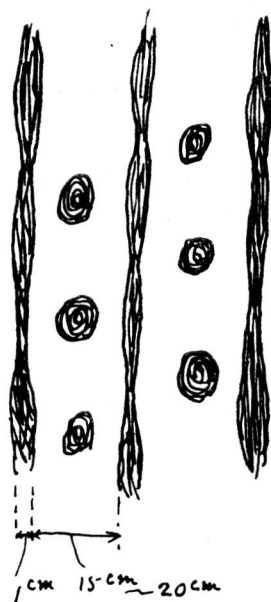
15時 2分 風弱る。光の弱りたることを著しく感ず。冷え冷えす。

15時11分 風全く止む。光弱し。空ますます晴る。

15時16分 夕暮の來れるやうに感ず。人の顔少々黄色に見ゆ。

全員各位置につく。學生が「陰影帯が走る走る」といふ、地上に敷いた白布の上を黒、

ウス墨の線様のものが甚速に走る。次第に其色がはつきりしてくる。樹葉の



遠輕で見たシャドウバンド

(吉井氏描寫)

影がとがつて、大きな爪のやうに見える。望遠鏡をのぞく。ペーリーのビルが見える。チラチラと！ツツウと。あつ、無くなつた！

高城先生の「ゴ」の聲。シャツタの音。感激の呻。何と云ふ素晴らしい、コロナ！！

眞黒な太陽の周圍に、5本の光芒の束が遠くは、太陽直径の3倍も伸び、其最大の一は金星の眞近まで行つてゐた。中央はウス董色、次第に橙黄金色となつて薄れてゐる。其中を幾本かの筋がとほつてゐる。2ヶ所ばかりに、眞紅のフロミネンスが見える。すべての色彩の配合は何といふ美しさか。否！！それ全體が、何んと云ふ莊嚴な宇宙の現象であらう。私は何も彼も打ち忘れて茫然としてゐた。暗黒な太陽の右下端から、パツと光が出た。ダイヤモンドリングだ。平和山に萬歳の聲が起る。「ヲハリツ」の號令に我に歸つた。全員の顔は青ざめ、眼は涙にぬれてゐる。「お目出とう」、「お目でとう」皆で萬歳を叫んだ。サイダーが運ばれた。乾杯をあげた。人々はやつと話をはじめた。

ああ、何といふ素晴らしい、神の仕業であらう。恐らく一生に一度すら、會ふことの出来ぬ此神祕な光景に。私は自分の幸福をつくづくと思つた。

やがて復圓の時刻がきた。英氣を養つた人々は、再び時刻の測定に最後の力を盡した。終つて記念撮影をなし、各サインをした紙片を交換して思出の地を去つた。

長い時日の間、たゆみなき準備の苦心の後に美事に此自然現象をキャッチ出来た臺員諸氏の感激は、また格別なものであつたことと思ふ。すべての感激の極は涙である。科學の使徒の苦心も、喜悅も、感謝も皆此感激にあるのではあるまいか。

私は此大なる天の異變に打たれると同時に、地上の科學の士の眞摯な態度に打たれた。二重の應激を柵に満たして歸ることができた。